
北風が吹いたら

辰巳尚喜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北風が吹いたら

【Nコード】

N0298P

【作者名】

辰巳尚喜

【あらすじ】

不景気の中、まじめで誠実な男と才能にあふれた男、将来に挑む男
偶然の出会いから何かが始まる。今までの全てが変わる、そして・

一人目

11月だと言うのに日中はポカポカ陽気で下手をすれば汗ばむくらいだった。

これも、昨今の温暖化のせいだろうか。

小野肇は公園の池のほとりのベンチですでに1時間はひなたぼっこに興じていた。

「何食べようかなあ」

誰に言うわけでもなく、小野は独り言をつぶやいた。

午後2時を過ぎた公園は至る所に人がいた。

スーツ姿のサラリーマンがサボっていたり、老人が暇に任せて鳩に餌を与えていたり、子供達がたわいもない遊びに夢中になっていたりと、午後の公園ののどかな風景がそこいらを支配していた。

その中で小野は一人、何を食べるかで頭を悩ませていた。

普通なら、何て暇な奴だと思うが、今の小野にとっては人生最大の決断だった。

小野肇は34歳、身長172センチ体重68キロ。

今は髪が少し伸びボサボサに近い状態だが、普段は短めの爽やかな感じだった。

見た目は全くの普通、何も印象の無いタイプだった。

ただ彼はもう3日も食べていない。

昨年末に働いていた電気部品の工場を解雇になった。

アメリカの馬鹿な奴のおかげで真面目に働く日本人が辛い目にあうはめになった。

まだ若いとは言え30歳を超えたこれと言って何も無い男に世間の風邪は冷たかった。

一ヶ月前までは何とか短期のバイトで食いつないでいたが突然と言うか必然と言うか仕事の話しは皆無になった。

一人目2

小野は努力を怠った訳では無い。

ただタイミングが悪いだけだった。

子供の頃から、何で周りで不利益な事が起こった時に何故だか小野がその場に居合わせて、損をする。

彼の34年間はそれの繰り返しだった。

仕事が無くなり、手持ちの金は底をついていた。

小野肇34歳の所持金は1231円。

仕事も無い、家も無い、金も無い、もちろん家族も無かった。

無い無いづくしの人生を小野は完全に無いものにしようと決めていた。

そお、自殺だった。

小野はここ数日水しか飲んでいない。

そこで最後に手持ちの1231円で何かを食べるつもりだった。

一人目3

最後の晚餐、そんなカッコイイものではない。

空腹で野垂れ死ぬ様なことは嫌だと思っていた。

最後まで美味しい物を食べ、満足感の中で人生を終えたいと思っていた。

ただ、残された現金は1231円！

決して散財できる金額ではない。

納得いくまで考えたいと、このベンチで考えていた。
目の前を子供が走り回るのを見ながら考え続けた。

「オムライスかハンバーグか」

食べたい物はいくらでも湧いてでてきた。

この一年あまりは我慢に我慢をかせねて過ごしてきたのだから。

「やっぱ、肉食べたいなあ」

考えては所持金の少なさで消えていくのが半分近く。

小野はふと隣のベンチで考え事をしている学生さんに目を止めた。

あのくらいの時は何がご馳走だっただろう？

金持ちではないが、貧乏ではなかった子供時代。

小学5年の時に父親が死んだ、病気を苦にした自殺だった。

優しい父親だったが、昔の事故の後遺症で苦しんでいた。

母親もそんな父親の面倒に疲れていた。

そんな時の自殺は悲しみはあったが、同時に開放感もあった事はない。

小野が高校にあがると、母親に男ができた。

相手は小さな酒屋の店主だった。

悪い人ではなかったが、今まで父親の看病をみて、その後は女で一人で小野を育てていた反動なのか、どっぷり男に溺れた。

あまり家に帰らなくなった母親

小野はバイトに明け暮れる様になった。

最初は定番のハンバーガーショップ

夕方から閉店まで、毎日ハンバーガーを作り続けた。

バイト終わりに貰える、残り物や失敗した物など、小野は喜んで持ち帰り食べた。

「ハンバーガーかあ」

これならいくつかは買える。

ただ、最近はハンバーガーも安い物があり、金の無い時などの定番だった。

「違うなあ」

小野はまた独り言を言い、その何か考え中な学生を見ながら、彼には明るい未来があるよね。いや、きっと明るい未来があると願った。

一人目4

相変わらずポカポカした陽気は続いていた。

小野は学生から視線を動かした。

相変わらず子供達は全身で楽しんでいるようだった。
さっきと反対側に小野より少し若そうな男が本を読んでいた。

真剣に本を読む男はカッコイイ雰囲気ながら、芯の強さを感じる横顔だった。

小野は彼みたいな感じだったらどうだったかと考えた。

高校を卒業後、都内の洋食屋に就職した。

元々手先が器用だったので、仕事はすぐに覚え、毎日忙しく働いた。

結構人気のお店ですぐに店舗展開し始めた。

小野も充実した毎日を過ごしていたが、ある日、店に泥棒が入った。

対した被害はなかったが、前日の最後に帰ったのが小野だった。

鍵をかけ忘れた訳ではなかったが、それを責められた。

実際は納入業者の鍵の閉め忘れだったが、小野は何も弁解せず、自分の不注意を詫びた。

一人目5

泥棒は小野せいではないが、オーナーの矛先は変わる事なかった。

何だかんだと言い掛かりをつけられ、最後はクビになった。

全くツイてない話した。

その後、レストランで働くが、そこは放火による火事で廃業。

次に働いたホテルは業績不振で廃業。

時代が悪いのか、小野自身がツイてないのか、うまくいかない日々が続いていた。

もし、自分が彼のようにカッコよく、強い感じだったら、今頃こんな風にベンチに座り最後の晚餐を考える必要は無かったかもしれない。

小野は優しく寡黙な男。

今までの人生はそれが裏目にでる事が多かった。

飲食店の最後に働いたのが御徒町にある町では有名な小さな洋食屋

「風の里」

家族経営のアットホームな店だった。

小野も30歳を目前にしていたが、その店では夢を見る事ができた。

真面目なうえに料理もなかなか上手だったので、オーナーマスターは偉く気に入り、一人娘の婿に迎えて店を継いでくれればと考えていた。

娘は正美と言い26歳だった。

OLの傍ら店を手伝い、清楚で可愛い娘だった。

小野は恋愛に積極的なタイプではないが、正美との関係は自然にそうなった。

一人目6

正美とは休日に出会う事がほとんどだった。

映画やコンサートには頻繁に出かけ、小野の唯一の趣味の時計を見てまわり、必ず勉強の為に話題の食べ物屋にいった。

「肇はやっぱり洋食屋がいいの、私はイタリアンとかも良いと思うけどね」

「洋食屋もイタリアンも変わらないんじゃないかなあ、うちにはパスタもビザもあるよ。」

「パスタって言ってもナポリタンじゃない」

「ナポリタンはキングオブパスタだよ。」

正美は少し呆れながら、誠実な小野の返答に喜びを感じていた。

彼女にとって小野はうってつけの恋人だったかもしれない。

頑固一徹、一代で町では有名な洋食屋を続けてきた父。

一人娘の男性関係には学生時代から本当にうるさかった。

大学の時にはこの親では自分は一生結婚など出来ないと思うほどだった。

真面目で大人しく料理の腕もいい小野は父親のお気に入りだった。

そんな男が娘の婿に来てくれれば万々歳だと思っていた。

正美も小野と出掛ける時は隠さずに言っていた。

そんな感じで一年がすぎた。

一人目7

小野は真面目に働き貯金もしていた。

結婚するには少し少ないが、30歳の男にしてはあるほうだった。

正美の方からそれとなく結婚話しが出る様にもなっていた。

そろそろ、その時期が迫っている事をみんなが感じていた。

オーナーマスター自身も最初は近くに住んでもらい、ゆくゆくは同居してくれればと考えていた。

何の疑いもなく、ただ自然な流れを楽しんでいた。

ところが、ある日常連客との会話がオーナーマスターの心に陰り現れた。

「正美ちゃんもそろそろやな、マスターも一安心ってとこかな？しかし一人娘を取られ、ゆくゆくは店も取られる。何となく寂しいな」客からすれば軽い言葉だったし、オーナーマスターにしても笑って流せる言葉のはずだった。

『取られる！』

この言葉がやたらとオーナーマスターの頭に残った。
小野が来て、店は以前にも増して活気づいていた。

料理の仕込みから調理まで、大半を小野が担当し、客の対応も笑顔で熟し評判もよかった。

それは喜ばしい事なのだが、何故だかひっかかる。

26歳で開業し、30年齒を食いしばって店を守ってきた。

娘も手塩にかけて育て、お茶やお花を習わせ、大学までだした。

オーナーマスターにとってはその二つが人生で誇れる物だった。

『取られる!』

その二つが一度に無くなる。

それはいつしか恐怖にも似た感情になっていた。

一人目 8

店での仕事に対し、オーナーマスターは厳しい対応になっていた。

小野は自分がまだまだだと思い、これもオーナーマスターの愛情だと思っていた。

その奥のオーナーマスターの気持ちなど微塵も感じていなかった。

一方で正美との関係は順調に進んでいた。

会えば結婚式や新婚旅行の話になり、正美は目を輝かせて話しつづけた。

小野は30歳を越えて、一つ夢があった。

唯一の趣味である時計を買う事だった。

高校時代、高橋と言う友人がいた。

小野と高橋は気が合い、いつも一緒だった。

暇があれば高橋の家に行き、たわいもない時間を過ごした。

その高橋の親父が大の時計好きだった。

所有する時計は30本以上あり、パテックフィリップからAランゲ&ゾーネやオメガ、ロレックスなど有名時計ばかりだった。

事あるごとに高橋の親父は時計について語った。クォーツと自動巻きについてや、ムーブメントや歴史について。

小野は興味をしめしたが、

息子の高橋は全く無関心だった。

高校卒業の時に限定のG shockを高橋の親父からプレゼントされた。

この時計の様に強く正確な社会人になれ、そしていつか、磨き抜かれた唯一無二な機会式の時計のような価値のある社会人になれ！

いいはなむけの言葉だと小野は思い、それ以降時計を勉強し、休みの日には時計屋をめぐり、いつかいい時計を買うと心に決めていた。

一人目9

二十歳から少しづつ時計貯金をしていた。

それが40万たらずあった。

結婚を前に夢の自動巻き時計を買いたいと思っていた。

正美にそれを話していた。

反対などするはずもない。

小野は趣味に浪費するタイプではなく。

堅実な男

「それで、何を買うの？」

「まだ迷ってるんだけど、ブライトリングかオメガかIWCか？」

「私がプレゼントしてあげる」

「ダメだよ！これは僕の夢なんだ。自分で買う事に意味があるんだよ」

小野は真剣な眼差しで正美に言った。

正美もそんな真剣さに喜びを覚えた。

この人だったら幸福になれると。

時計は次の休みに上野で買った。

悩みに悩んで、ブライトリング クロノオーシャン ヘリテージを買った。

潤沢なある訳ではない予算の範囲で買える物。

ケース径が46ミリと大きなタイプ

腕につけた時に、日々フライパンを振ってる小野の腕には大きく感じずにフィットしていると正美は思った。

小野はまるで子供が欲しいおもちゃを買ってもらったかのごとく喜び、目を輝かせていた。

36ミリのタイプを正美はペアとして購入した、

小野と気持ちを共有したかったのだ。

しかし、正美にとってはこれが小野との最後のデートになった。

一人目10

幸せから一転した。

小野はいつもの様に店の後片付けをしていた。

忙しい一日の最後にきっちりする、

この時間をいい加減にはしなかった。

「肇、お前何か隠してないか」

オーナーマスターが帳簿を付けながら言った。

「いえ、何も無いですけど」

小野は心当たりも無く、即答で答えた。

「お前、仕入れの金をごまかしていないか」

まさかの疑いだった。

店の金に手をつける、考えられない事だった。

小野は真面目で誠実な男

「そんな事してません！何かの間違いです」

オーナーマスターは小野の言葉など聞いていないかの様に叱責した。

小野は訳がわからなかった。

言われ事のどれもが身に覚えの無いことばかりだった。

混乱していた。

一人目11

「だったらそれは何だ！」

オーナーマスターは小野の左手に光る時計を指差した。

「これはこの前の休みに自分で買ったんです。」

「そんな高価な時計をどうしたら買える」

オーナーマスターの追求は続いた。

「二十歳からずっと貯めていたもので買いました。正美さんに聞いてください」

小野も必死だった。何も嘘はついていない。

自分で貯めたお金で確かに自分で買った。

何一つやましい部分はない。

「正美まで巻き込んだのか！」

オーナーマスターは全く信用する気配な無かった。

「仕方が無い、金は目をつぶってやる。その代わり、御礼の前に二度と顔だすな」

青天のへきれきだった。全く予期もしていない言い掛かりだった。

オーナーマスターには取り付け島も無かった。
小野はただ悔しくて情けなくて、握りこぶしを握り締める他なかった。

一人目12

小野は泣いた。又しても起こった不運を恨んで。そして、人が信じられなくなった。

翌日、せっかく買った念願の時計と便箋に

正美、ゴメン。でも、僕は何もしていない

そう書き残し、いなくなった。

それ以降、小野は出来るだけ目立たずひっそり生きてきた。

あてもなく途方にくれたあの頃。

救いは何もなかった。

「太郎丸ラーメンにしよう」

急に小野は思い立った。

「風の里」で働いていた頃、仕事終わりの休みの日によく食べたラーメン屋

当時のアパートの近くで、豚骨ラーメンに焼豚丼のセットが小野の定番だった。

大盛りでも値段は同じ、おまけにサービスのキムチも食べ放題

一人暮らしには有り難い店だった。

「確かに950円だったよなあ」

正美と初めて二人で食べたのもここだった。

いつも何食べてるかとか聞かれ、よく行く「太郎丸ラーメン」を教えると一緒に行くといってきた。

始まりはそこだった気がする。

小野は正美の笑顔を思い出した。

もう戻れない、今までの人生で一番幸せだったあの頃。

忘れられないあの夜のあと、あてもなく電車に乗りたどり着いたのは、工業団地だった。

家電メーカーの部品工業が建ち並ぶ町でたまたま見つけた求人になのままだ応募した。

それから2年、住み込みの3交代勤務をただ言われるがまま続けた。

一人目13

仕事は単純なものだった。

ベルトコンベアーで流れてくる部品にハンダ付けしていく。

何も考えずただ黙々と。

小野にはそれで十分だった。

寝る場所も飯もあり、決して多くはないが給料もある。

人と係わり合う事に抵抗があった。

また、今までと同じ様な事が起こる。

そんな恐怖はいつも頭の何処かにあった。

その中で唯一の友達がいた。

ブラジルからの出稼ぎ労働者のシジマール。

ブラジル人のなかでも一際陽気な男だった。

歳は小野と同じ、褐色の肌に白い歯、少しちじれた髪でちよつとした優男だった。

シジマールは事あるごとに小野に話しかけた。

最初は警戒していた小野も何時しか彼とは話すようになった。

その頃の唯一の救いだったかもしれない。

一人目14

シジマールは日本に来て3年になる。

この工業団地には多くのブラジル人がいる。

家族でいる者や単身でいる者

みんな祖国から遠い日本へ夢を見て来日している。

そこは決して裕福な暮らしがある場所ではないが、幸せだけはあった。

「ハジメ、ディナー食べに来ないか？」

流暢な日本語を話すシジマール

「行ってもいいのか？」

「大歓迎だよ、妻も娘も喜ぶ」

屈託のない笑顔にいつしか引き込まれていた。

シジマールの家はこのあたりの出稼ぎ外国人達が多く住む団地の一部屋だった。

6畳の部屋が2つに小さいキッチンが一つ

家賃は一月1万5千円だった。

奥さんのマリサと4歳になる娘エレンとの3人暮らしだった。

マリサもエレンもシジマールと同じく明るく陽気だった。

「イラッシャイ、ハジメ」

マリサは大歓迎で迎えてくれた。

小野が久しぶり味わう家族の温もりがそこにはあった。

事あるごとにシジマールの家に呼ばれた。誰かの誕生日やブラジルの祭事など。

陽気な彼らの中で小野は味わった事のない仲間がいる楽しさを経験していた。

「ハジメ、またオムライス作ってね」

エレンは事あるごとに小野にオムライスをねだった。

一度作った時にシジマールもマリサもエレンも大喜びだった。

「ハジメ、お店のオムライスみたいだよ！すごくおいしい。」

みんな小野の手つきの良さにビックリしていた。

それから、エレンのために何度かオムライスを作った。

いつも小さいエレンは足元で背伸びしてオムライスの出来るのをじっと見ていた。

そして、美味しそうに食べてくれた。

小野が小さな幸せを感じる瞬間だった。

「いつでも作ってあげるよ」

「ヤッター！今度はドキンちゃん描いてね」

一人目15

日本の景気は上がらなかった。でも、それなりに仕事はあり、多くを望まなければ楽しくもあった。

ところが、アメリカで起きた金融不安は恐るべきスピードで景気を悪化させた。

期間労働者の小野達にも冷たい風が吹き出した。

派遣切り！まずは年寄り、そして外国人だった。

すでに三交替だった勤務は二交替に変わり、休みも多くなっていた。

「ハジメ、とうとう俺達も切られる」

シジマールが珍しく神妙な顔で言った。

「どうするの？」

「日本に居たいけど、このままではブラジルに帰るしかないね。」

小野は心が痛んだ。

真面目に働く外国人達を小野は見てきた。

そりゃ、中には悪い奴もいる。

それは外国人に限った事ではなかった。

しかし、今の小野にはどうする力もなかった。
それから一週間後、シジマールたち外国人労働者はクビになった。

テレビのニュースは派遣切りの話題を取り上げてはいたが、だから
って何も変わらない現状があった。

シジマール家族は一ヶ月後にブラジル帰国した。

帰り際にシジマールは絶対連絡するからと笑顔で言った。

小野もそれにおうむ返しのように答えた。

エレンは寂しさを身体いっぱい表現し、出発ぎりぎりまで小野に
まとわり付く状態だった。

「ハジメのオムライスおいしかったよ。また、食べれる？」

小野は今にも涙がこぼれそうになるのを我慢して。

「大丈夫、きつとまた食べるよ。」

それが大人嘘と気づいているのか、エレンは精一杯の笑顔で頷いた。

シジマール家族は笑顔を絶やす事なく日本からさっさといった。

一人目16

小野たちの待遇も日に日に悪くなっていった。

まだ、働けるだけでしたと思うしかなかった。

職場はいつ切られるかわからない不安感でいっぱいだった。

そんな中でも、小野は真面目に仕事をこなした。

シジマール達がいなくなり、淋しさはまたもやってきていたが、これ以上悪くならない事を祈っていた。

しかし、現実は厳しかった。

容赦ない首斬りが始まった。

いくら真面目で堅実な小野でも、その対象に違いはなかった。

年末の仕事納めの日が最後になった。

住み込みの小野にとって会社を失うと同時に住まいも失う

一ヶ月の猶予はあったが、部屋を探すのは一苦勞だった。

小野は必死で住まいと仕事を探した。

その頃の世間是最悪な状態だった。

あれから一年、辛く暗い絶望の繰り返しだった。

新しく何かを得るより、一つまた一つと失って行く物が多かった。

そして今、小野はこうして公園のベンチで最後の晚餐を考えている。

「バシャン！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0298p/>

北風が吹いたら

2010年11月20日22時48分発行